

保育実習生として

成長していく時に大切なこと

梅田 優子

はじめに

教育実習及びその事前・事後指導のあり方は、保育者養成にとって重要な課題です。私は、学外学習担当者窓口として二年目を経験していた二〇〇二年一月に、実習協力園の保育者の方たち八十九人に、実習評価についてのアンケート調査を行いました。お忙しい中で

実習生を受け入れていただき、またその様子を養成側へ返していただいている保育者の方々の実習評価に関する意識の一端と、本学の現在使用している評価票の再検討の手がかりとなる資料を得ようと考えたからです。回収率は七十七パーセントでした。

今回の調査は、その目的からも明らかのように、対象も限られています。しかし、その分、できるだけ保

育者の方たちがどのように感じておられるのかをとらえることができるようになりました。実習協力園の保育者の思いを知ることができたことは私にとっては大きい収穫でした。本稿では、その中で、保育者の方たちが実習においてどのようなことを大切に考えておられるのかについて書きたいと思います。それは保育者としての成長を考える上でも示唆を含んでいると感じます。

回答者の概要

回答くださった方は、保育歴五年未満、五年以上十年未満、二十年以上の方が約三割ずつ、十年以上二十年未満が約一割の内訳でした。私立においては保育歴十年未満の占める割合が高く、公立においては二十年以上の保育者の割合が多いという特徴をもっています。

実習の評価をする際に

大切にしていることについて

保育者がどのようなところを大切にしてお実習生の評価を行っているのかを聞きました。自由記述で求めましたので、記述された文の内容、使用された単語・句等の整理や分類を行い、その特徴を明らかにしようと思いました。一人の方が幾つかの視点から書いてくださっている場合もあり、その際には複数の分類に属するので、必ずしも総和が、全回答者の総和と重なってはいません。記述内容から大まかに五項目に分類されました。



1. 実習に臨む姿勢・意欲

実習評価の際に大切にしていることとして、学生の実習に臨む姿勢・意欲についての記述がほぼ全員に見られました。保育者の方たちは、この後の項目でも、全般的に実習生の姿勢を見ていこうとする傾向性を持っていました。ここではその中でも『実習という場
に臨む際の構え』のような記述を分類しました。

例えば、「幼児理解や保育の技術については未熟なものがあったりまえてるので、やる気や意欲が感じられるか」といった記述が二十三件あったのをはじめ、姿勢に関しては、「前向き」（十四件・以下同様にカッコ内の数字は記述件数を示します）「積極的」（八）「一生懸命さ」「熱意」「誠実であるか」（各四）といったこともあげられていました。また「学ぼうとする姿勢」（八）もありました。保育実践の場の中で、『まずは何ごとにも自ら体験していこう・学んでいこうとする姿勢を大切にしたい』と多くの保育者が考えている

といえるようです。

さらに、『体験を通して自分なりに考える姿勢及び、それを次に生かそうとする姿勢を大切にしていきたい』とする記述も二十四件見られました。例えば「実習とは教科書やその他の書物から離れ、頭の中で考えるだけではなく身体全体を使いながら、子どもたちと触れあうことのできる数少ない場となります。そのため成功すること、失敗し挫折することにより、その後工夫し達成感を得る等、短期間で様々な気持ち味わうこととなります。その中で実習生が自分自身で悩み考え、前向きに取り組んでいたかどうかを大切にしたいと思っています」「自分なりの課題をもちながら前向きに取り組んでいるか。日々の話し合いの場で自分なりの反省や思っていることをしっかりと表現できるか。また、反省したことを自分なりに次に生かしていこうとする構えが見られるか」などです。

これらについては、高野らのアンケート調査の結果

と重なる部分があります。実習評価二十八項目について三段階評定により、保育者の重視度を探っています。その結果、特に二年生においてはその評定者九十・一パーセントが「積極的に学ぼうとする意欲があつたか」を「特に重視する」と回答しており、次いで高かったのが「子どもたちの中に積極的にはいつていたか（八十五・八パーセント）」でした。調査対象（保育所）や、項目の設定の仕方の違いもあり単純には比較できないでしょうが、それでも子どもにかかわる場の保育者が実習に重視するものの共通性は感じさせられます。実習生の心情や意欲を重視する傾向は「通年教育実習」体制で実習をおこなっている石川ら²⁾の結果にも共通しています。

改めて、実習が実際の保育の体験の場であるという原点を確認するならば、前述した実習生が自ら体験していることとすること、そしてその体験を通して保育時間終了後に考察しようとする事、それをまた動きの

中で生かしていることとする事、という体験的な学習の本質的な営みを保育者は支えていこうとしているとも考えられました。そしてこの営みは、保育者としての実践と実践後の省察という、保育の質を高めていくための本質的な営みにつながるものとも思います。「教育実習が学生にとって『経験学習』の場であると共に、その学習の仕方（観察・記述・表現）自体が、教育実践学の基本的あり方を学ぶ基盤となっている。」との小川の指摘も重なってきます。

2. 子どもとのかかわりと理解

子どもとのかかわりの姿勢や理解を大切にしているとの記述も四十五件あげられています。子どもとのかかわりの面に力点をおいた記述（十二）としては「子どもと接している時の様子。例えば自分から積極的に関わっているか、子どもと接しているか、子どもの声をききとめているか。子どもと同じことをまねたり、子ども

と同じ視線に立つてものを見ようとしているか。子どもと遊んでいる時の表情など」といったものです。理解に力点をおいたり、「両方をあげる記述（九）」としては、「子どもたちをよく理解しようとしているか」「子どもに対する理解度」「幼児の内面的な理解、思いを知ろうとしているかどうか。幼児と共に生活を楽しむことができるかどうか」などです。

子どもとのかかわりに関しては、かわる姿勢というだけでなく、実際に実習生の行動としてどうであったか、また子ども理解に関してもその姿勢だけでなく、実際に理解できているかどうかをあげるなど、その姿勢と同時に実際にできるかどうかといった記述が混在している点に特徴があると考えられました。

子どもとのかかわり、かわりつつ理解していくことは最も基礎的な保育行為です。外側から子どもを理解するのではなく、かわることに基本を据えて理解していこうとする姿勢や態度及びその力の育成

が、実習段階で重要であるとする保育者の志向性がよみとれます。

江口⁴⁾らの調査においても、保育の知識や技術の習得も大切ですが、それ以前に子どもとのかかわりの中で子どもを理解するということができない学生が多いと実習園が捉えていることなどを明らかにしています。

子どもや保育理解の力の育成には、かわりを通しての学びと同時に、少し身を引きたいわゆる第三者的な立場からの観察によって可能となる学びの両方がバランスをもってなされることが必要ではないかと自身は考えています。実習生の成長の時期等考慮して、そ



のバランスのありようを考える必要性を感じさせられました。

3. 実習の記録／責任（部分） 実習／

評価票記入の際に關すること

これらが、残りの三項目で、記述の割合はぐっと減ります。

実習の記録に關しては、「日誌、指導案の提出状態」

(五)、「生活の中で起こったけんかや子どもたちの様子を見ての“実習生の考え”が記入されているかという点です。

〈例〉○○ちゃんの気持ちはくだったのではないか。

○○先生はくと思いでこう話していたのではないか。○○くんの行動はくだからだと思ふなどが大切」

(四) 等です。提出状況という基本的態度についての側面と、自分の考えが記入されているかどうかが大切にされています。

責任実習に關しては、「事前の準備をしているか」

といった点が強調されており、その部分実習の実際がどうであったかというよりは、それに向けて実習生ができるだけの努力をしているかどうかを大切にしていることが窺えました。

評価票記入の際に關することとしては「優れていると思われるところ、足りないと思われるところどちらかのみならず両方について触れていきたい。かたよった視点にならないように心掛けている」などです。その他としては、「気配り」(二)、「笑顔」(二)「素直さ」「温かさ」「明るさ」「その人の持つ雰囲気」「人間性」(各一)など、性格や資質を大切なものとしてあげている保育者も少数ですが見られました。

おわりに

このアンケートでは、実習生の評価票をつけるにあたって、なにかがしかなかったり疑問に感じたりする人が

全体の六十四パーセントもおられることや、その内容についても幾つかの特徴が見えてきており、今後考えをみたい課題です。

これらの結果をふまえ、養成の側としての実習への願いなどもあわせて、今年度から評価票を改変しました。実習打ち合わせ会での話し合い等を通して、学生の実習体験をより生かしていくことができるような実習及び事前事後指導のあり方を探っていきたいと思っています。

最後になりましたが、お忙しい中、質問紙に回答をいただきました本学幼児教育学科実習協力園の先生方に御礼申し上げます。
(県立新潟女子短期大学)

引用文献

(1) 高野卓郎・中野友三・柿本因子・須田康之「保母養成に関する総合的研究Ⅲ―保育実習評価項目に関する考察―」

比治山女子短期大学紀要第26号67―78頁 一九九二年

(2) 石川清明・野本茂夫・宮崎豊「通年教育実習の成績評価について(1)～(6)」日本保育学会第48～53回大会発表論文集 一九九五～二〇〇〇年

(3) 小川博久「教育実践学のフィールド・ワークとしての教育実習」東京学芸大学教育実習研究指導センター研究紀要 第20集19―34頁 一九九六年

(4) 江口裕子・糸静子・豊永家壽子・坂口りつ子「保育所・幼稚園における実習指導の実態と課題(Ⅰ)(Ⅱ)」日本保育学会第46回大会発表論文集172―175頁 一九九三年